

白堅と岡部長景
—ある中国人と華族政治家の
「石鼓文」拓本をめぐる交流の背景—

兼田 信一郎

白坚与冈部长景
—记录1940年一个中国人与一华族（旧公卿）政治家围绕
《石鼓文拓本》展开的交往—

KANEDA Shin-ichiro

獨協大学国際教養学部
マテシス・ウニヴェルサリス 第13巻 第2号
2012年3月31日 発行

Mathesis Universalis Volume 13, No.2
Department of Interdisciplinary Studies Faculty of International Liberal Arts,
Dokkyo University, Japan
March 2012

白堅と岡部長景
—ある中国人と華族政治家の
「石鼓文」拓本をめぐる交流の背景—

兼田 信一郎

白堅与冈部长景
—记录1940年一个中国人与一华族（旧公卿）政治家围绕
《石鼓文拓本》展开的交往—

KANEDA Shin-ichiro

笔者2009年在东京将带有书套的《石鼓文》拓本弄到手，并发现其中还带有记录其由来的信件。据信件记载，此拓本是1940年3月由北京的白坚赠给东京的冈部长景的。本论文将参考迄今的研究成果，试图阐明此两者是何等人物和1940年赠送拓本的缘由。

白坚是将包括敦煌写本的众多中国文物贩卖给日本的中间商，上世纪20年代到30年代期间曾多次往返于中日两国间。冈部长景则是华族官僚・政治家，从1920年代开始就积极参与外务省东方文化事业以及战前日本的对华文化事业。

虽然无从得知此二人是何时相识的，但介绍他们认识的是水野梅晓。水野在明治末期到中国支援过孙中山，是曾活跃于日中关系正面舞台后的人物。他与冈部关系密切，两人在1937年末大力推进过将东亚同文书院转迁北京的运动。水野与白坚在1944年玄奘三藏遗骨分骨时曾有过接触，但也不排除在此之前两人就已相识的可能性。

以上三人的共同点是，都站在「反共」的立场上，「推进保存、传承和研究华北所存诸文物」。由此可以推断，白坚当时将所在不明的石鼓文的拓本赠送给冈部，是向他呼吁文物保存所处的危机状况，同时企图和立场相同的冈部拉拢关系，并通过他结识更多的人脉。

はじめに

筆者は2009年7月に東京で「石鼓文」の原拓10枚を偶然入手した。拓本10枚

は「石鼓文」と書かれた題簽が貼付されている書帙に入っていた。

「石鼓文」は中国最古の金石史料として夙に有名であり、石鼓自体は現在、北京故宫博物院に収蔵されている。それ自体かなり傷みが進んでいるようで、そういうことからすれば、この原拓10枚は最近のものではないと思われる。

ところで、この書帙には「白堅」なる人物が「岡部長景」なる人物にこの石鼓文の拓本を贈ることになった由来を記した書簡が添付されていた。

この書簡に登場する二人の人物のうち、白堅については、近年、高田時雄氏が詳細な調査をし、論文を発表している¹⁾。また、岡部長景は大正末から昭和初期に外務省で東方文化事業部長を務め、あるいは日満文化協会の副会長に就任するなど、戦前の対中国文化政策に深くかかわった人物であった。

本稿は、先行研究をもとに、なぜ1940年に「石鼓文」の拓本が一中国人から日本の華族政治家に敬贈されることになったのか、その背景について、両者の経歴をたどりながら探ってみたものである。そこに垣間見えるのは、日中戦争勃発後の華北での日本の文化政策の一端でもある。今回、貴重な情報を提供していると思われる添付書簡の内容を紹介しつつ、二人の人物の来歴をふくめて一度この段階でまとめてみることにした。

1、「石鼓文」拓本と白堅より岡部長景あて書簡

まず、白堅が岡部長景に送った書簡を掲げてみよう。

上述したように、入手した書帙の中には、全面拓10枚のほかに、帙裏に貼りつけてある封筒と、別に「石鼓文」と書かれた封筒が入っており、この中に2通の書簡があった。また「佐藤弘藏」と印字されている蔵書票が貼付されていた(後掲写真①・②・⑧)。「佐藤弘」なる人物については今のところ不明である。

貼付された封筒の宛名は「岡部長景子爵閣下」となっていて、岡部の住所は「東京市赤坂区丹後一〇」となっている。これは現在の港区赤坂4丁目16番地付近である(写真③)。

封筒裏にある差出人の白堅の住所は「北京 南池子 綬庫 普度寺前巷十一號 電話東局三五一」である(写真④)。

貼付封筒の消印は「北京 23, 3. 29 | 17 PEKING (10)」とある。また

1) 高田時雄「李滂と白堅—李盛鐸旧藏敦煌写本日本流入の背景—」『敦煌写本研究年報』創刊号、2007年(以下高田①と略記)。および、同「李滂と白堅(補遺)」『敦煌写本研究年報』第二号、2008年(以下高田②と略記)。

残されていた書簡の1通には日付が入っていて(後掲の書簡B)「歳次庚辰三月」とある。そして、1940年の干支がちょうど庚辰であるので、この書簡は、中華民國29(1940)年3月23日に北京で投函されたと考えられる。

また、封筒の裏にも消印があり、それには「北京 24 3 40 | 21 PEKING」とあり、1940年3月24日21時の消印がある。なお、表には最下部に朱色の罫線で「R | No.1469」と印字されたスタンプの上に「PEKINO (G ?) s/o10」と捺されている。

高田氏によると、京都大学人文科学研究所には民国28(1939)年に白堅から倉石武四郎、吉川幸次郎あてに出された札状が所蔵されており、その封筒に記されている住所も同一である²⁾。

ところで、2通の書簡だが、1通(書簡Aとする)は貼付された封筒に納まるので問題はない。おそらくこの貼付された封筒に入れられて岡部に送られたものと思う。もう1通(書簡Bとする)はこの封筒には納まらないが、「石鼓文」と書かれた封筒には収まる。したがって、書簡Bは、おそらく3月23日に送られた書簡(書簡A)とは別便で郵送された原拓に添えられていたものと考えられる。

次に2通の書簡の内容を掲げる。

【書簡A】(写真⑤)

比日東風扇淞(淑)好花將開伏惟
起居勝常百為有喜大寒之時
伏承
惠箋旅行歸來始獲拝讀如親
光霽感激於懷不可言喻茲敬上
石鼓文拓本一帙聊以將意此石有
二千七百年之經過其詳見金石萃編
第一頁今輾轉何許思之慨然此拓
本今亦不易得矣惟
省覽之餘乏(定)有悲夫禹域文物
因變亂而愈益蕩然亟有待
賢智之共圖整理而維護之者

2) 前注1 高田②187-189頁。

矣肅此不備

三月廿三日

白堅頓首上

岡部長景子爵閣下

【書簡B】（写真⑥・⑦）

（冒頭から韓愈の「石鼓歌」を書録する）

右韓愈石鼓歌石鼓自元以来度置北京孔子

廟七年前張學良遷之南京今不知所往此可

為長太息痛恨者矣茲僅有此拓本存敬以贈

岡部長景子爵閣下願相與共祝斯石之永存禹

域也歲次庚辰三月西充白堅

書簡Aによると、先に岡部から書簡が届き、それを読んで感激した白堅が岡部にこの石鼓文の拓本を贈呈したという経緯が判明する。その際、この石鼓自体その所在がわからず、この拓本自体も得がたく貴重なものであると言い、中国の騒然たる状況下において、これらの文物の整理と維持・保護をなしえる人物が速やかに現れることを望む、としている。

また、書簡Bは、石鼓文に関わる韓愈の「石鼓歌」の全文を掲げ、その後この石鼓が元朝以来北京の孔子廟（現在の首都博物館）に置かれていたが、7年前、つまり1933年に張学良によって南京へ移された後行方がわからなくなったことを嘆き、この貴重な拓本を岡部に送り、願わくば共にこの石鼓が永遠に中国に残ることを祝ろう、としている。

この書簡A・Bの内容から判明することは、岡部から届いた手紙に感激した白堅が、1933年に張学良の手によって北京より南京に移されて以降行方不明となっている石鼓文の原拓を敬贈した、ということであり、書簡Aは3月23日に北京で投函され、書簡Bは原拓に添えられて岡部に送られたときのものと考えられる。

この石鼓の変転について、中西慶爾編『中国書道辞典』の「石鼓文」の項には³⁾、

（前略）その後五代にいたって一時行方不明を伝えられたが、金が崛起す

3) 木耳社、1981年、初版本、564頁。

るに及んで北京に持ち運ばれ、孔子廟内に置かれるにいたってようやく安定し、世はしばしば変転しても、その居を変えることがなく清末に及んだ。わが国の熱河作戦以後一時姿をかくし、あるいはアメリカに転出したなどともいわれたが、今は厳然として故宮博物館に現存する。(下略)

とあり、中西氏によると、1933年1月に始まった熱河作戦で日本軍が河北省へ侵攻した後に所在が不明となったとしている。この記述が何によったかは不明だが、少なくとも石鼓が一時行方不明になったことは確かなことであろうし、白堅の記述によるならば、それは張学良が石鼓を移したことに起因することになる。このことは石鼓の流転の経緯を考える上での新しい情報といえよう。ただ、それが真相だったのかどうかは、また別に検討を要する問題であろう。ちなみに1960年頃に石鼓は故宮にもどっていたらしい⁴⁾。

2、白堅について

さて、1940年当時貴重なものになっていた「石鼓文」原拓を岡部に敬贈した白堅というのはいかなる人物なのであろうか。

この人物について、近年非常に詳細な調査をされたのが高田時雄氏である。おそらく、白堅をめぐる専論としては高田氏の論文が唯一のものと思われる⁵⁾。そこで、ここでは高田氏の論文をもとにその経歴をたどってみたい。

高田氏によると、白堅の履歴は橋川時雄の『中国文化界人物総鑑』⁶⁾に掲載されており、それによると、彼は1883年四川省西充県の生まれで、日本に留学し、

4) ちなみに、中村不折『石鼓之詳説上』(法帖書論集、雄山閣、昭和8年12月初版、昭和14年再版)は「満州事変以来南京に持ち運ばれ其後に何処にか転じ今は所在が明らかでない。或はいふ米国に持ち去ったと、それも想像に過ぎない。」(9頁)としており、石鼓の南京移送を満州事変時としている。もし、白堅の言うごとく1933年の熱河作戦の最中張学良が南京へ移送したならば、中村の「満州事変以来」という記述は誤解ということになるが、中村と中西の記述を見る限り、石鼓移送に関する情報源は同一と考えられる。なお西林昭一『中国書道文化辞典』(柳原出版、2009年6月)によると石鼓は現在故宮博物院内の石鼓館に収められている。

5) 前掲注1 論文参照。その他では大川富士夫「『古本三国志』をめぐって」(『立正大学文学部論叢』第62号、1978年)が晋写本三国志残巻の来歴をめぐる記述の中で白堅に言及している(35-37頁)。

6) 北京、中華法令編印館、昭和15年10月。

早稲田大学政治科で学んだらしい⁷⁾。帰国後國務院の簡任職存記となり、1924年に成立した段祺瑞執政政府の秘書庁編訳主任となった。さらに、民国27(1938)年に臨時政府内政部秘書となり、また師範学院の国文教習を兼ねた。白堅はかねてより金石書画への興味多く、古石経の残石も所蔵していた。また「余園詩社」を組織した、としている。

高田氏は、白堅は傅増湘が社長をつとめた雅言社という団体に評議として橋川時雄とともに参加していたので、橋川と白堅は面識があったはずであり、その橋川の記述である以上その内容はおおよそ信用できるとしている⁸⁾。この履歴の中では、段祺瑞政府の秘書編訳主任を辞職したと思われる1926年から臨時政府内に職を得る1938年までが空白期間となっており、高田氏は、この期間に白堅が何をしていたのかが問題であるとしてその解明をすすめた。その結果さまざまな状況証拠から、羽田亨が李盛鐸旧蔵の敦煌写本432点を入手するさい、それに関与した重要人物が白堅であり、彼は先の空白期間にたびたび来日して、中国文物の日本への売込みを行っていたとし、白堅は中国文物の仲介を生業とするブローカーであった、とした⁹⁾。白堅がもたらした中国文物は、この敦煌写本のほかに、トルファンで発見され、現在京都国立博物館と東京の書道博物館に所蔵されている「晋写本三国志呉志残卷」をはじめ、多岐にわたっている¹⁰⁾。

ところで、高田氏は白堅の経歴を橋川の記述にもとづいて紹介する中で、1938年に彼が就任した臨時政府内政部秘書について「臨時政府とは言うまでもなく汪兆銘の南京政府であり、師範学院とは淪陷期北京に置かれた国立師範学院のはずである。」としている¹¹⁾。しかし、汪兆銘はこの年、すなわち1938年12月に重慶を脱出し、昆明をへてハノイに入り、翌39年5月周仏海とともに来日し、その後1940年に南京に中華民国国民政府を樹立している。つまり、38年段

7) 橋川の記述では、「早稲田大学政治科を卒業」となっているが、高田氏によると卒業者名簿にはその名は載っていないとのことである。

8) 前掲注1 高田①8頁。

9) 同上高田①8頁および17頁。

10) 高田氏はこれ以外に白堅がかかわり、日本にもたらされた中国文物として、現在書道博物館が所蔵する「摩訶般若波羅蜜多經第十四」(梁天監11年写本)、「仏説金剛波羅蜜經」(梁大同元年写本)、「三体石経残石」、北三井家所蔵の「敦煌写経」、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵の「唐写本説本解字残卷」などをあげている。なお、「晋写本三国志呉志残卷」については、前掲注5の大川論文参照。

11) 前掲注1 高田①8頁。

階では汪兆銘政権は成立していない。しかも、彼が兼任している師範学院は北京にあり、仮に汪兆銘の南京政府で内政部秘書の任についたというのが正しいとすると、北京の師範学院で国文教習を同時に勤めるのは現実的には不可能となる。では、橋川という「臨時政府」とはどの政治機関を指すのかといえ、それは1937年12月北京に成立した王克敏の中華民国臨時政府のことであろう。この臨時政府の中に内政部と呼ばれる部署ができるのは38年8月だった。

1938年、当時貴族院議員であった小山松吉は、北京で開催された東亜文化協議会に日本側副団長として出席し、帰国後の10月、その模様を「東亜文化協議会に出席して」と題して日本外交協会の例会で報告した¹²⁾。この中で小山は、協議会の内容を報告する前に、当時の北京臨時政府の教育部の実情を述べている。その中で臨時政府の概要を説明しているが、そこに次のようにある。

臨時政府は昨年（1937年-筆者注）12月14日に北京に出来まして、仕事を始めたのは本年になつてからで、殊に教育部あたりが着々と仕事をしますやうになりましたのは、二月頃からでありました。（中略）行政部総長は矢張王克敏氏で、教育部総長が湯爾和氏、治安部総長が齊燮元氏、法制部総長が朱深氏、振済部総長が王揖唐氏と言ふことになつて居ります。本月（8月-筆者注）十九日の発令で行政委員会の振済部と行政部は共に廃して、今度は内政部と財政部と云ふのが出来たのであります。

この小山の発言に明らかなように、1937年北京に成立した中華民国臨時政府に「内政部」なる部署が出来たのは38年8月だった。また、白堅が兼任した師範学院も同年の5月に北京に開設されている¹³⁾。しかも上述したように、白堅は1939年に北京から京都の倉石、吉川宛の書簡を出しているのである。このように見てくると、白堅は1938年前後には北京に在住し、王克敏の北京臨時政府に奉職しつつ師範学院で教鞭をとっていたと考えたほうが自然であろう¹⁴⁾。

12) 「82. 東亜文化協議会に出席して」（貴族院議員小山松吉氏述）JACAR（アジア歴史資料センター）：Ref. B02030923500（第6画像）「日本外交協会講演集」第6巻。

13) 前掲注1 高田①8頁の注25参照。なお、当時臨時政府の下で男子師範学院と女子師範学院が開校したが、小山は、そのうちの男子師範学院を訪れ「実に立派な学校であります。生徒数も二百二十余名居ってこれは宇田尚君が前から指導して居ったとのことであります。」と述べている。前注12文書、第9画像参照。

14) ただし、王克敏の臨時政府は、1938年南京に成立した梁鴻志を行政院長とする中華民

さて、白堅の経歴を記した橋川の『中国文化界人物総鑑』は昭和15（1940）年10月に出版されている。従ってその後の白堅の活動はこれではわからないのであるが、高田氏はこの点についても資料を博搜している。ここでは、岡部長景との関係を考える上で関わってくるものを取り上げることとする。

昭和17（1942）年、関東軍の高森部隊が、南京中華門外の日本軍兵器廠の裏手の丘で、稲荷神社建立のための整地作業を行っていたところ、偶然玄奘三蔵の遺骨と思われるものを発見した¹⁵⁾。その後、調査が行われ大きな話題となったようだが、やがて霊骨塔が建設され、その落成式に日本から附葬品が寄贈され、倉持秀峰日本仏教連合会会長と水野梅暁が式典に参列した。そしてその際、中国側があらかじめ分骨しておいた頂骨の一部が日本に手渡され、他の一部が北京から来た白堅を通じて北京にもたらされたようだ¹⁶⁾。戦争中の白堅が北京を中心に活動をしていたことを示す情報である。また、後述するが、玄奘三蔵の頂骨を持ち帰り、それを埼玉県岩槻の慈恩寺に安置し、霊骨塔の建設に奔走したのは水野梅暁だったが、この水野と大変親しい関係にあったのが岡部長景

国維新政府とともに1940年3月末に解消し、汪兆銘政権の下、華北政務委員会に再編された（委員長は王克敏）。従って、結果的に白堅は汪兆銘政権の人物とはなるが、38年段階ではそうではない。

- 15) このことについては、春日礼智「玄奘三蔵の遺骨発見」（『ひのもと』昭和18（1943）年5月号）と谷田閔次「大報恩寺三蔵塔遺址発掘の顛末」（『支那仏教史学』7巻3号、1944年）に報告がある。前掲注1 高田①15頁および注56参照。また、三蔵法師の会会報『真風』第1号（1984年5月）に、元高森部隊の衛生軍曹であった鈴木栄太郎氏が発掘の様様を記している。なお、朝日新聞2007年1月10日朝刊13版6面に「三蔵法師の骨どこに」と題する記事が掲載されており、これによると最近中国では南京発見の遺骨は別人のものという説が出ているようである。
- 16) 前掲注1 高田①15頁および注56参照。高田氏は、張恒「在南京発見の唐玄奘遺骨」（『江蘇文史資料選輯』第10輯、江蘇人民出版社、1982年12月）に拠ってエピソードを紹介している。そこでは玄奘頂骨の分骨が1943年2月23日に中国側褚民宜、日本側重光葵大使参列のもと行われたとする。しかし、日本に送られた頂骨を供養している慈恩寺の元住職である大鳥見道師の『日本玄奘塔建設の由来』（玄奘三蔵鑑仰会、1953年5月、1982年再版）によると、1943年2月23日は、頂骨および出土品を中国側に引き渡した頂骨奉迎式が行われたのであり、翌44年10月10日の南京の霊骨塔落成式の際に日本側に分骨が引き渡されたとしている。また、同寺前住職の大鳥見順師の『三蔵法師と慈恩寺』（華林山最上院慈恩寺、1986年1月）では、頂骨の一部が「日本仏教徒へと一倉持秀峰代表に手渡され、更に一部が北京の白賢居士に贈られました。」（5頁）とある。「白賢居士」とは「白堅」のことであろう。

である。彼は、この靈骨塔の起工式および落成法要に参列している。

もう1つの資料は、白堅へのインタビューである。

昭和16（1941）年4月上海日本総領事館嘱託となり大使館特別調査班に所属していた木村英夫は、以後数年にわたり、上海在住あるいは上海滞在中の日中要人にインタビューをおこない、貴重な戦争中の証言をまとめた。その著書である『民族の咆哮』¹⁷⁾の中に、「正義日本の往時に立還れ」と題する白堅の談話が掲載されている。そこには「華北民衆団体反共大同盟理事長、白堅氏談」とあり、「氏は華北に本拠を有する反共大同盟及敬天会の指導的地位にある老闘士である。（昭和18年10月）」と彼を簡単に紹介している¹⁸⁾。わずか5頁のものであるが、日本に留学したのちも何度も日中の間を往復し、親日的であったはずの白堅は、この中で華北を占領した日本軍が「同甘共苦」といいながら、いかに中国民衆に残酷なる仕打ちをしているかを訴え、汪兆銘政権への批難とともに日本側に中国民衆に対する政策を根本的に転換するよう求めている。

このインタビューをおこなった木村は、基本的に上海にいたのであり、白堅も上海にいたようにも見えるが、このころ白堅が北京に拠点を持っていたことは、上述した玄奘三蔵頂骨分骨の際にも「北京から来た」と記されていることからわかる。しかも、ここでの彼の肩書きは華北に本拠を持つ反共大同盟の理事長であり、昭和18（1943）年前後でも彼の活動の拠点は北京にあったと考えられる。

そのほか高田氏は、新中国成立後は白堅にとって極めて厳しい時代となったが詳細は不明であるとした上で、いくつかのエピソードを紹介している。それによると戦後においても美術品の売買を行っていたようだ。そして、「感心させられるのは白堅が関与した文物がみなそれぞれ一級品であったことであり、この方面における彼の見識の高さが認識される」と述べている¹⁹⁾。

以上のように、高田氏によって明治から昭和にかけての白堅の活動の概要が明らかになったが、そこに見えてくるのは、昭和初期にさかんに中国文物の日本への売り込みをかける「ブローカーとしての姿」であった²⁰⁾。しかし、その売り込み先は主に学者・芸術家を中心であり、以下に紹介する岡部のような官僚・政治家とのつながりはほとんど出てきていない。その点では、岡部との接

17) 雲母書房、1995年5月。

18) 前注『民族の咆哮』310頁。なお前掲注1 高田①15頁、および注57参照。

19) 前掲注1 高田①16-17頁。

20) 前掲注1 高田①9頁。

点は貴重な情報となるのではないだろうか²¹⁾。

3、岡部長景について

さて、次に、手紙を送られた側の岡部長景とはどのような人物なのか、彼の経歴の概略を見てみよう。彼は学者ではなく、外交官僚であり、華族政治家であった²²⁾。

長景の父^{ながもと}長職は、幕末の岸和田藩の最後の藩主であった。彼は廃藩置県後、福沢の慶応義塾で研鑽をつみ、明治初期にアメリカへ留学し、留学終了直前にイギリスへ渡り、駐英臨時代理公使として大隈重信・青木周蔵らがすすめた条約改正交渉に携わった。帰国後は貴族院議員として院内会派「研究会」の創設に尽力した。その後1916年から枢密顧問官に就任した²³⁾。

長景は、長職の長男として明治16（1884）年8月28日東京麹町に生まれ、明治44（1911）年7月、東京帝国大学法学部卒業と同時に外交官補に就き、翌年米国大使館に赴任し、その年、加藤高明の長女悦子と結婚した。米・英での勤務の後、大正9（1920）年に外務省亜細亜局第二課長に就任した。昭和2（1927）年6月外務省対支文化事業部長に就任し、昭和4（1929）年から翌年にかけて内大臣秘書官長として牧野伸顕に仕えた。ところが、昭和5年に貴族院議員に当選し（研究会所属）、父親の跡を継ぐように政界に入る。昭和10（1935）年に陸軍政務次官に就任するが、翌年の2・26事件ではほとんど関わっていないようだ²⁴⁾。昭和18（1943）年4月、東条内閣の文部大臣に就任する。この年の10月に学生生徒の徴兵猶予が停止され、学徒が出兵すること（いわゆる「学徒出陣」）となるが、そのときの文部大臣であった。戦後は戦犯容疑者として巣鴨に収監されたが、昭和22（1947）年に釈放された。昭和27（1952）年国立近代美術館館長に就任し、また国際文化振興会理事長にも就任した。昭和45（1970）年5月30日に東京で死去した。現在、父親とともに岡部家の菩提寺である岸和

21) ただ、高田氏も述べているように、白堅の交友関係はたいへん豊富であったようで、岡部との関係も当然推測できよう。前掲注1 高田①14頁。

22) 岡部の経歴に関しては、尚友倶楽部編『岡部長景日記』（柏書房、2003年11月）の三浦裕史「解説」参照。また、彼の父親岡部長職の生涯を記した小川原正道『評伝岡部長職』（慶応大学出版会、2006年7月）の「エピソード」でも、長景の生涯について触れている。

23) 前注『評伝岡部長職』参照。

24) 前注『評伝岡部長職』316頁。

田市の泉光寺に葬られている。また岸和田市名誉市民ともなっている。

岡部が中国と関係をもつことになったのは、大正12（1923）年3月に、日本政府が始めた対支文化事業に関わったのが契機であったと思われる。

対支文化事業は、当時反日感情が強まっていた中国に対して、アメリカの文化政策を見習い実施された文化事業である。具体的には義和団事件の賠償金などを基金として「対支文化事業特別会計」が設けられ、中国人留学生の学費支給、研究機関での学術研究、東亜同文会や同仁会による教育・医療事業の支援を主な内容とするものだった。

大正12（1923）年7月、当時対支文化事務局事務官であった岡部は、文化事業実施の前提として、中国の実情を探るため、外務省嘱託・東京帝国大学教授入沢達吉とともに中国にわたり、約1ヶ月半のあいだ調査をし、現地の有識者から意見を聴取した²⁵⁾。そこでの知見に基づいて、外務省は「汪一出淵協定」を結び、対支文化事業の基本条件を定めた。翌13（1924）年末に対支文化事務局は「文化事業部」と改称された。そして協定によって文化事業の実施組織として北京に東方文化事業総委員会が設置された。

以後、東方文化事業は、北京人文科学研究所と上海自然科学研究所を開設し、日中の学術交流の場となるはずだった。しかし、昭和3（1928）年に済南事件がおこると、中国側委員はこれに抗議して文化事業総委員会から引き上げてしまい、事業は停滞した。このとき文化事業部長だった岡部は、日本の中国研究者を支援し、日本国内での学術研究機関の設立に動いた。こうして東方文化学院が誕生したのである。

この件に関して、山根幸夫氏は「当時、わが国の中国研究者の代表は、服部宇之吉と狩野直喜であった。（中略）服部・狩野をバックアップしたのは文化事業部長の岡部長景であった。岡部と服部・狩野との間には早くから密接な交流があったらしい。恐らくこの三人の協議・検討によって、支那文化研究所（東方文化学院）設立の方向性が打ち出されたのであろう。」としている²⁶⁾。しかし、阿部洋氏は、28年5月29日の東方文化総委員会日本側委員会の席上、岡部文化事業部長から服部・狩野に日本に総合的な中国文化研究機関の設置の内意が伝えられた、としている²⁷⁾。いずれにしても、中国での学術研究機関の設置・運

25) 前掲注22『岡部長景日記』「解説」、および「資料1「視察報告草稿」(対支文化事業関係資料)」参照。

26) 山根幸夫『東方文化事業の歴史』（汲古書院、2005年1月）108頁。

27) 阿倍洋『対支文化事業の研究』（汲古書院、2004年1月）466頁。

営が困難になる中²⁸⁾、日本国内に中国研究機関を開設することに岡部は大きな役割を果たしたといえよう。

その後、岡部は1929年1月に文化事業部を去り、内大臣秘書官長兼式部次官次長に就くことになる。昭和5（1930）年に貴族院議員に当選した岡部だったが、満州事変の後1933年、発足した日満文化協会では副会長に選出された²⁹⁾。

こうしてみると、岡部はイギリスからの帰国後、外務省で一貫して対中国文化事業に携わってきた。文化事業の要である研究所事業の外務省の統括者として、また東方文化学院設立の際にも文化事業部長として活躍した。文化事業部を離れた後も中国とのかかわりはなくなり、日満文化協会の副会長として文化交流にかかわっている。さらに彼は、1936年から39年まで東亜同文会の理事長に就任し、対中国文化事業にかかわり続けているのである。

4、岡部・白堅の接点と水野梅暁

（1）白堅と岡部の邂逅

さて、「石鼓文」の原拓を納める書帙に添えられた書簡に見える白堅と岡部長景についてやや詳しく紹介してきたが、では、この二人は一体どのような経緯で知り合ったのであろうか。このことこそ書簡の背景を探るもっとも重要な点なのであるが、実は現時点ではほとんど確実なことがわからないのである。

白堅は、高田氏が指摘しているように、1920～30年代しばしば日本に来ていたようだ。また行動範囲が広く交友関係も広がったようであり、当然東京にも来ていて接触する機会は十分にあったと思われる。しかし、高田氏の調査で接触が垣間見られるのは、敦煌文書や三体石経など中国文物の転売を介しての専門家や芸術家との接触であり、政治家・官僚との関わりは見えてこない。また、彼は段祺瑞の政府から離れたのち、38年に北京臨時政府の内政部秘書に就くまで、政治の世界とはあまりかかわらなかったように思える。さらに、白堅は岡部が以前に北京で石鼓の実物を見ていることに言及していない。

28) 中国では27年、北京王府井大街、東廠胡同の黎元洪旧邸宅跡に人文科学研究所が開設され、終戦まで「統修四庫全書提要」の編纂が若手中国人研究者を中心に進められたが、日本の敗戦まで完成はしなかった。一方上海自然科学研究所では日中の共同研究体制が維持され、リベラルな雰囲気が保たれていたようである。前掲注26山根著書参照。

29) 日満文化協会の成立事情に関しては、岡村敬二『日満文化協会の歴史—草創期を中心に—』（私家版、2006年10月）に詳しい記述がある。

先にふれた『岡部長景日記』附録の、中国各地の実情視察をおこなった報告書の草稿と思われる「視察報告草稿」の中の1923年8月6日の記載に、

夫れより孔子廟に赴く。周代の石鼓あり。隣には国子監あり。古の書を講ぜし即辟雍の名、泮宮の名あり。

とあり、23年8月、北京市の北東部にある孔子廟で石鼓を見たことを記している³⁰⁾が、白堅は、このことにはまったくふれていない。むしろ、先に掲げた白堅の書簡の中では、石鼓が当時行方不明であり、この拓本の希少性が高いことを強調するとともに、白居易の石鼓歌をわざわざ全文書写し添付している。つまり、岡部には石鼓文に関する知識・情報が全くないことを前提にして書簡と拓を贈っているように思える。とするならば、白堅は、岡部に関して、彼がどの程度中国文物に関する知見を持っているのか、あまり情報を持ち合わせていなかったと思われる。ということは、白堅と岡部は、知り合ってからあまり時間がたっていなかったのではないだろうか。あるいは、知り合ったばかりかも知れない。

では、なぜ1940年の時点で白堅は感激して石鼓の拓本を贈ることになったのであろうか。それを考えるには、このころ、つまり1940年前後の岡部の動向を見るよりほか手だてがないようだ。

(2) 東亜同文書院北京移転問題

先に記した経歴では詳しく触れなかったが、岡部は昭和11(1936)年から14(1939)年6月までに東亜同文会の理事長を務めた。

東亜同文会は、近衛篤磨を会長に組織された、日中の親善を唱え、同時に現地中国での語学習得などを通じて中国関係の実務に明るい人材を育成する文化団体だった。そして、1936年その会長に就任したのが近衛文磨であり、同時に岡部が理事長に就任した³¹⁾。

昭和12(1937)年末、この東亜同文会に大きな問題が起きた。それが、東亜同文書院の北京移転問題である。そして、この問題に深くかかわったのが岡部と水野梅暁であった。

30) 前掲注22『岡部長景日記』562頁。

31) 石田卓生「東亜同文書院の北京移転構想について」(『中国研究月報』63巻2号、2009年)25頁。

石田卓生氏によると、昭和12（1937）年7月、第二次上海事変が起き、11月には徐家滙の虹橋にあった東亜同文書院の校舎も焼失した。その時、すでに同文書院は長崎に疎開していたが（同年7月）、校舎消失直後に同文書院幹事の久保田正三が上海の実情と上海への復帰の可能性をさぐるために派遣され、その報告書が12月に理事長の岡部に提出されている。ところが、同じ11月ころ、岡部から同文書院を北京の清華大学跡に移転させるという構想が持ち上がった³²⁾。

外務省外交史料館にある「昭和12年12月、同文書院ヲ北京へ移転問題」という一連の文書の中にある「在支邦人教育機関ニ関スル要旨」によると、岡部は11月26日以前に同文書院の北京移転を提示した私案³³⁾を陸軍に提出し、軍部はこの構想にかなり興味をもち、外務省に伝え、検討を求めた。一方、この構想が持ち上がると、同文書院卒業生の間から反対が沸き起こったらしい。そして、11月下旬に卒業生有志による会合が開かれ、この問題を討議した結果、この構想は席上で否決された³⁴⁾。しかし、その後も岡部は、北京移転案が私案にもかかわらず、水野とともに近衛首相や各大臣の同意をとりつけ、実現をはかろうとしたのである³⁵⁾。しかし、同文書院の卒業生で当時外務省東亜局長だった石射猪太郎はそれに強硬に反対した³⁶⁾。それは単に石射一人の考えではなく、外務省の意向でもあったようだ³⁷⁾。結局37年12月に東亜同文書院の上海復帰が決定し、会長近衛の名で校舎として使用することに予定している上海交通大学の

32) 前注論文19頁-24頁。

33) 「在支邦人教育機関ニ関スル要旨」「2一般（16）同文書院ヲ北京へ移転問題昭和十二年十二月」JACAR: B05015340900（第2画像）東亜同文書院関係雑件第4巻。

34) 伊藤隆、劉傑編『石射猪太郎日記』（中央公論社、1993年7月）昭和12年11月27日の記載に「午後6時から同文会に於て書院復興計画につき意見交換会あり、拙者は上海を主張して中座す。」（223頁）とあり、会合が11月27日に開催されたとなっているが、石射の「同文書院北京移転問題」「2一般（16）同文書院ヲ北京へ移転問題昭和十二年十二月」JACAR: B05015340900（第14画像）によると、11月26日になっている。前掲注31石田論文31頁注（40）参照。

35) 「同文書院北京移転問題」「2一般（16）同文書院ヲ北京へ移転問題昭和十二年十二月」JACAR: B05015340900（第14画像）。

36) 前掲注34『石射猪太郎日記』昭和12年12月6日の記載に「岡部子、水野和尚来訪。同文書院を北京に移すべしとの趣旨を大学制案にて巧みに説きたてゐる。手は見えずて居る。所説納得できずと主張す。岡部子は和尚に乗ぜられたのだ。」（227頁）とある。石田前掲注31論文24頁参照。

37) 石田前注論文20-22頁。

修繕費の見積を請求している。同文書院の北京移転はここに挫折した³⁸⁾。

さて、ここで注目すべきは、岡部が同文書院の北京への移転を構想し、水野とともに執拗にその実現にこだわった理由である。北京移転問題に関する一連の関係文書の中に岡部が提出した「在支那人教育機関設立ニ関スル要旨」には、

一、支那事情ニ精通シ将来支那ニ於テ活動シ得ル邦人子弟ノ系統的教育機関ヲ北支及南支ニ設立スル事

一、北支ニ於ケル教育機関トシテハ曩ニ兵火ニ罹リタル上海同文書院ヲ至急復興スル必要アルヲ以テ応急ノ処置トシテ之ヲ北京清華大学跡ニ移転シ教育ヲ継続セシムル事

(中略)

一、上海ニ於ケル同文書院ノ地位ハ南支ニ対スル我国ノ教育機関トシテ之ヲ更生セシムル事

一、前期教育機関ノ学制其他ニ関シテハ時代ノ要求ニ応シ得ル様委員ヲ設ケ審議セシムル事

一、右ニ要スル経費ニ関シテハ我国ノ文化国策ノ一部トシテ之ヲ考慮スル事

とあり、人材育成の急務と上海の校舎焼失の緊急措置として、北京への移転を提案している。しかし、ここでは移転先をなぜ北京にするのかについての積極的理由は記されていない。あえて北京にこだわった理由を挙げるなら、資金援助まで申し出るといふ軍当局の支援であった。陸軍から外務省文化事業部に回ってきたこの「要旨」に付されていた附箋には

岡部長景子ノ案ニシテ趣旨同意ナリ御研究ヲ御願ヒシ[?]

と記され、「軍務課」と書き直下に「宮本」の印が捺してある。これを見ても岡部私案は最初軍部が支援していたことがわかる³⁹⁾。さらに、岡部が水野を伴

38) しかし、石田氏によるとその後も北京での教育機関設置の提案はなされたようである。石田氏前注論文26頁。

39) 同じ付箋に「林ハ反対ノ意思ヲ表明スミ」とあり、外務省側の書き込みがある。この「林」とは、文化事業部第一課長林安のことであろう。また、同じ文面で外務省用紙のものがある。石田前注論文21頁。

って石射を訪ね、北京移転への同意を求めた際、

石射局長ニ対スル岡部理事長ノ提案大要左ノ通北支ニ於テ日本側教育機関
設立方ニ付テハ軍当局ハ大賛成ニシテ之カ為ニハ在北京清華大学ヲ提供シ
且軍事費ヲ割愛シテ之カ達成ヲ援助スル見込アルヲ以テ北京ニ同文会総合
大学（仮名）ヲ創立シタシ（下略）

と述べ、軍の後押しがあった⁴⁰⁾。おそらくこれは陸軍の華北工作の一環として
あがってきた案であったのだろう。しかし、それだけではなく、岡部自身にも
華北＝北支への独自のこだわりがあったようである。

彼は、東亜同文会の雑誌『支那』に寄稿した論説⁴¹⁾の中で次のように述べて
いる。

幸ひ北支方面は、支那文化の淵藪であり、古来北平を中心として発達して
来て居るのみならず、現在北平には近代的な文化施設も多々あるのである。
（中略）此の地に於て先づ所謂文化の戦を展開して行くならば、支那の民
心も必ず我が国の大目的に対して理解を持つやうになることと信ずるの
である。尚ほ是は単に北平方面に於ける地方的の問題ではなくして、漸次
実現せらるれば纏て支那全土に波及し、啻に支那のみならず、世界に向っ
て日本の正義人道の大なる力を現実に示すことが出来るのではなからうか
と思うのである。

彼は、この論説の中で、共産主義の拡大あるいは西欧物質文明にたいし、武
力による戦いだけではなく、「文化の戦い」（共産主義に対する思想戦争、物質
文明に対する東洋精神文明）を打ち出し、文武両道による国家の興隆を説く。
そして、そのために中国文明淵源の地北京に文化の戦いの拠点を置こうと考
えていたようである。こうした彼の発想の背景には、おそらく、かつて東方文
化事業に関わり、日中の学術交流の深化を図り、また満州文化の保存研究を担
うはずであった日満文化協会の日本側副会長として事業に関わったように、中
国との学術交流やその他のさまざまな文化事業に携わる中で生まれてきたもの

40) 前掲注35文書中の「同文書院北京移転問題（1）石射東亜局長談」。

41) 「軍事膺懲と併行すべき「対支文化工作」速行の急務を提唱す」（『支那』28巻10号、東
亜同文会、1937年）16頁。

考えられる。

ところで、東亜同文書院の北京移転問題には岡部と親しい水野梅暁がからんでいた。上述のように、岡部が石射を訪問し、北京移転構想への同意を求めたとき水野が同道している。また、昭和12年12月8日付の広田外務大臣から在北平参事官森島守人へ送られた、「東亜同文書院北支移転問題ニ関スル件」と銘打った電信文に

水野梅暁貴地出張中特務部軍係官トノ間ニ東亜同文書院貴地移転（清華大学校舎使用）ニ就キ話合アリタル趣ニテ水野帰来後本件進行方策動中ナル処同文書院北支移転ハ異論多ク同文会トシテモ何等之ヲ決定シタルモノニアラズ殊ニ当方トシテハ上海時局モ相当平静トナルヘキニ就テハ明年四月ヨリ同文書院ヲ上海ニ復帰開校セシムルコトニ方針決定シ居ル次第ニ付キ右御含置相成度尚本件ニ関シ水野ハ或ハ再ヒ貴地ニ赴ク趣ノ処軍側ニ於テハ本件ニ関シ現地ニ於テ水野トノ話合ヲ一応差止メ当地中央部態度決定ノ上改メテ電報スルコトトシ柴山大佐ヨリ特務部根本大佐宛何分ノ指示アル迄本件具体的工作ヲ差控ヘラレ度旨電報シタル趣ニ付右併セテ御含ミノ上可然御処理相成度シ（軍側ト折合済）

天津へ転電セリ

とあり⁴²⁾、上部欄外に「本件林ヨリ大臣ニ報告スミ」と記し、文化事業部第一課長林安の花押が書かれている。この内容を見る限り、東亜同文書院の北京移転構想は、北京滞在中に水野が陸軍特務部と話し合っただけで打ち出したものだったことが判明する。ということは、水野は帰国後この構想を同文会理事長の岡部に持ち込み、その後両者が北京移転計画を進めていったということになる。

その水野は昭和12年10月に中国に渡航しているが、その際、外務省から身分証明書が発給された。その申請控えが残っているが、それによると、申請は10月1日に理事長岡部から文化事業部長岡田兼一宛に出されている。それには

本会ニ於テハ時局ノ進展ニ鑑ミ今回北平ニ本会支部ヲ設置ノ事ニ決定致シ其準備トシテ本会評議員水野梅暁氏ヲ派遣可致同氏ハ十月十日頃東京発大連、新京、奉天、天津ヲ経テ同月二十五日頃北平着ノ予定ニ有之候間同氏

42) 「東亜同文書院北支移転問題ニ関スル件」「2一般（16）同文書院ヲ北京へ移転問題昭和十二年十二月」JACAR: B05015340900（第18画像）。

ノ為メ身分証明書ヲ御下附被下度願上候（下略）

とあり⁴³⁾、ここでは、同文会の「支部」を北京に設置するという理由づけがされている。ところが、この申請書の欄外に手書きで

同文会内情聴取シタル処本件水野派遣ハ岡部子ノ独断決定[?][?][?]ナル由

とあり、水野の派遣は岡部の独断であると記されている。とすると、両者の間では、北京に同文書院の「支部」を開設するか、あるいは同文書院に類似した教育・研究機関を開設するか、どのような形であれ、何らかの文化・教育機関を設置することが10月以前から検討されていたと考えられる。そして、水野は同文書院の「支部」ではなく、同文書院そのものを北京に移すことを軍部との接触の中で考え付いたと思われる。そういう点から言えば、北京移転計画の原点はやはり水野であった。

その水野は、以前から岡部と親しい間柄で、岡部の対中国認識や対中国文化活動に大きな影響を与えたと思われる。さらに、白堅と岡部とが知り合うきっかけにこの水野が関わっていたとも考えられるのである。では、水野梅曉とはいかなる人物であったのか、次にみてみたい。

（3）水野梅曉について

水野梅曉は1878年広島・福山に生まれ、13歳で出家し、京都大徳寺塔頭高德院で修業した後東京に出た。1901年、東亜同文書院長根津一の書生として中国に渡り東亜同文書院で学んだ。1903年1月単身湖南省長沙に赴き、湖南僧学堂、碧浪新亭、雲鶴軒などを建て、文化交流に尽くしていたが、その後、大谷光瑞の知遇を得、真宗本願寺派に転じた。また、この頃に孫文とも知りあい、以後その支援にまわった。1911年の辛亥革命が勃発すると、野戦病院を開設し、負傷した兵士の救助にあたった。革命後は中国と日本を往来し、さまざまな分野の裏方で活動した人物である⁴⁴⁾。

43) 「身分証明書下附願」「26. 人事昭和十二年中」JACAR：B05015249100（第5画像）東亜同文会関係雑件第7巻。また前掲注34『石射猪太郎日記』10月13日の記載に「水野梅曉氏と早朝会見、許大使を見舞いがてら往訪した話をする」（206頁）とある。そうすると、あるいは水野の出発は10日以後だった可能性もある。

44) 松田江畔編『水野梅曉追懷録』（私家版、1974年11月）是水野の死後、関係者が水野梅

大正12（1923）年、関東大震災が関東を襲った。そのとき日本に滞在していた多くの中国人留学生も罹災した。混乱の中、彼ら中国人留学生の消息を尋ね、一時帰国させるべく奔走したのが水野だった。そしてその年の10月、本郷の麟祥院で日華学会主宰による「中国人留学生罹災者追悼会」が開催された⁴⁵⁾。この会の開催にも水野は尽力したようだが、この追悼会に岡部が出席している。おそらくこのころ水野は岡部と知り合ったと思われる。

翌24年、水野は、そのころまで所属していた東方通信社を辞めると、新たに外務省情報部、文化事業部や日華実業協会の援助を得て支那時報社を立ち上げ、雑誌『支那時報』を主宰し、中国に関する調査資料を提供していった⁴⁶⁾。また、日中の仏教界の交流にも携わり、大正14（1925）年東京芝増上寺で東亜仏教大会が開催された際、準備委員として中国側との連絡や企画に奔走した。その年の秋、日本仏教徒による訪中旅行が実現したが、この旅行にも水野は関わっている。と同時に、中国関係の僧侶の来日の手続きや訪華団の手配に尽力したのが文化事業部長の岡部である⁴⁷⁾。

その後岡部は文化事業部を辞し、一時中国問題に関わる機会は少なくなったと思われる。しかし、満州事変後に発足した日満文化協会で、再び水野とともに中国問題に関わっていくことになる。

暁の人物像を語った貴重なものである。なお柴田幹夫「孫文と大谷光瑞」（『孫文研究』21号、1997年）に水野と大谷光瑞の関係が考察されている。

45) 日華学会とは、中国人留学生を諸方面で援助をし、また、来日する中国人研究者の援助を行うなど、日中交流の促進のための団体だった。この団体は罹災した中国人留学生の一時帰国を実現すべく奔走していたが、水野もこれに多大な協力をした。その帰国事業では「右送還事務援助と一行見送りのため芝浦乗船地に来着せられて居た東方通信社の水野梅暁氏は自ら進んで船中一切の幹旋に当たるべく、自宅へも告げずに突然に同乗し、多大の便宜を与えられたのは深く感謝する次第である。」（砂田実編『日華学会二十年史』日華学会、1939年5月。阿部洋監修、佐藤尚子等編『中国近現代教育文献史料集Ⅰ日中両国の教育文化交流』第2巻、日本図書センター、2005年1月に再録、85頁）とあるように、援助活動に尽くした。

46) 田中清「水野梅暁師追憶記」（前掲注44著書所収）57頁。

47) 前注田中「水野梅暁師追憶記」60頁に「この東亜仏教大会の開催にせよ、日本仏教徒の訪華旅行にせよ、何れも外務省文化事業部の援助の下に実施されたものであって、当時の文化事業部長たりし岡部長景氏（現近代美術館長）の熱心なる支持ありしことを特記しなければならぬ。」とあり、この事業でも岡部の協力が大きかった。なお、柴田幹夫「水野梅暁と日満文化協会」（『仏教史研究』38号、2001年）に東亜仏教大会と仏教訪中団の経緯が詳述されている。

日満文化協会は、昭和8（1933）年、羅振玉が大連で、水野に自身の所有する文物の目録を示し、これらの保存と後世への伝承を希望したことをきっかけにして、日本と満州国の学界の共同で、明清の档案、四庫全書の刊行、国立博物館の建設など満州古文化の保存と研究をはかるべく成立した文化事業団体である。創設にあたって、中国側との折衝や日本側との連絡など、例によって奔走したのはやはり水野だった⁴⁸⁾。

同年10月、日本からの参列者もふくめて新京で設立総会が開かれ、総裁に溥儀、会長に鄭孝胥が就いた。また、副会長は満州国側と日本側それぞれ1名を選出することになり、満州国側は寶熙が就任したが、日本側ではこの時点で決定されなかった。帰国後12月外務省文化事業部で開催された評議員会議の席上、日本側の副会長には「社会上に相当の地歩を占むる名望家を選定する方が、協会将来の爲めに得策なるべし」として岡部が推薦され、満場一致で決定した⁴⁹⁾。一方、水野は「精神的には日満両国の碩学耆宿の驥尾に附して、樸々なる風塵の中を往来し、多少なりとも学界に貢献することを得るとすれば、何物にも換え難き満足と快樂⁵⁰⁾」を感じずるとして評議員を辞退したものの、満州国側から推挙され評議員に、のちには理事になった。したがって、この団体においても水野と岡部は、再び中国での文化学術事業にともに関わっていくことになった。

こうした長年の付き合いと、対中国文化事業での協力関係は、両者の間に信頼と尊敬を生み出していったようだ。岡部是水野の追懷文集に寄稿し、その中で水野は「自分にとって無二の兄友であった」と記している⁵¹⁾し、水野に対して、その中国に関する見識の高さと、さまざまな事業を企画し実行して行く行動力を高く評価していた。現在、水野の墓は神奈川鶴見の総持寺にあるが、その傍らに立つ墓碑の撰文と揮毫は岡部の手になるものである⁵²⁾。

この水野は、日満文化協会設立後も満州での古文化の保護・調査に従事し、更に熱河地方の文化の保存にも関わっていた。そうした彼の心情には、満州・華北における文化保存が中国文化の真髄の保護・発揚となると考えていたよう

48) 水野梅曉「東方文化の復興」（同著『満洲文化を語る』支那時報社、1935年5月、所収）に経緯が語られている。なお前掲注29岡村著書、および前注柴田論文参照。

49) 前注『満洲文化を語る』214頁。

50) 前注『満洲文化を語る』215頁。

51) 岡部長景「梅曉君を憶う」（前掲注42『水野梅曉追懷録』所収）11頁。

52) 前注書巻頭「墓碑拓本」写真。

だ。彼は、「東方文化の精髓」と題した講演で「私は皆様と共に、かくして發育する満洲国の前途を祝福すると同時に、本部支那で亡び行く、東方古文化が、満洲の天地で保存せられ、發揚せられんとすることは、何物にも代へ難き歎喜である」と述べ⁵³⁾、満洲・熱河での文物・建築の保護などの文化事業こそ満洲国の建設に欠くことのできない事業と主張している。そうした彼の姿勢は、華北における「文化の戦い」を主張した岡部と共鳴する部分があったといえる。つまり、若くして中国にわたり、中国社会に精通し、なおかつ、仏教も含めた中国文化に傾倒しながら、さまざまな分野でフィクサーとして活動していた水野と、東方文化事業に関わり、水野と中国問題で活動していく中で、中国文化の淵源である華北を拠点に東洋の精神文明を覚醒せしめ、共產主義イデオロギーを「文化の力」で克服せんとする文化政策にむかっていく岡部は、ともに「中国文化の中心である華北（北京）に日本の文化事業遂行のための拠点を築く」という点において軌を一にしていた。先に触れたように、東亜同文書院自体の華北移転の発案もおそらく水野だったと思われるが、その考えに岡部がただちに共鳴し、移転運動をともに推進していく背景には、両者のこうした共通した考えがあるといえよう。そして、白堅もこの点では考えを共有できる人物であったのではなかろうか。

(4) 白堅・岡部・水野

ここで、白堅・岡部・水野の関係をこの時点で整理してみよう。

白堅と岡部につながりあったことは、石鼓文拓本の敬贈と貼付の書簡で明らかだが、どのような経緯で知り合ったかは不明である。ただ、知り合ってあまり時間がたっていないと考えられる。

一方、岡部と水野は大正末期には知己の仲であり、1937年末の東亜同文書院北京移転構想を共同で推し進めるなど、対中国文化事業について深い信頼関係で結ばれていた。とすると、白堅と水野がどのような関係にあったかが問題となる。しかし、今のところ両者の関係をうかがう材料は極めて少ない。

1つは上述した玄奘三蔵頂骨の分骨に際して両者が関わっていたことである。日本側は仏教連合会会長倉持秀峰と水野が南京に赴いているが、交渉は実質水野が行ったことは容易に想像できる⁵⁴⁾。北京からきた白堅とも当然会った

53) 前掲注48『満洲文化を語る』100頁。

54) 藤井草宣「回想の水野老師」（前掲注44『水野梅曉追懷録』所収）の中で、「長い間私は仏教界には水野老師以外に、一人も支那通はないと思っていた。しかし、必ずしも

はずである。ただし、接触して具体的に交渉があったかは分からない。一方白堅の動きは、汪兆銘の命令で南京にきて交渉したという情報や、霊骨を受け取った後、五台山の僧侶や北京の老僧と飛行機で北京にもどる際のエピソードが残っているだけである⁵⁵⁾。

もう1つ、水野と白堅のつながりをうかがわせるものがある。それは東京目白にある永青文庫が所蔵している三体石経残石の拓本である⁵⁶⁾。この拓本は、曹魏の正始年間の三体石経で、『書経』の残石の拓本である。そしてその左辺下に白堅の印が捺してある。この印は、筆者のもつ石鼓文の拓本10枚のそれぞれに捺されていた印の中の1つと同一のものであった。なぜ、このような白堅の印のある拓本が永青文庫に存在するのであろうか。実はそこにも水野が関わるのである。

三体石経残石拓本を所蔵する永青文庫は、細川家の旧私邸を利用して発足した美術館である。所蔵品は、熊本細川家に伝わる多くの名品の他、16代当主細川護立によって収集された中国関係その他の美術品のコレクションでも知られている。コレクターとしても有名な護立は、1922年、先に紹介した日華学会の会長にも就任した。就任のいきさつは不明だが、この団体の評議員に岡部も水

彼一人というわけではなかった。諸官庁方面にも顔が通り、また所謂支那通や支那浪人の方面にも顔があり、何事も敢然として一手で引き受けて、計画も立て奔走したのは水野老師一人であった」(50頁)と述べていることからすると、この中国との関係や、頂骨を受け取った後の行動を見ても、彼が中心であったと思われる。

- 55) 前掲注16張恒「在南京発見の唐玄奘遺骨」の中に、北京にもどる飛行機の座席の位置をめぐって、白堅を三蔵法師の乗った馬に見立てて遺骨をもつ法師の前に座らせたというものである。「汪兆銘の命令で南京に来て交渉した」という情報はインターネット上に「霊骨分蔵一玄奘三蔵の遺骨の行方一玄奘三蔵会佃一可」(<http://7a.biglobe.ne.jp/~ikka/ikotu.htm>)というサイトに「日本軍指揮官稲田大佐は大喜して日本に持って行こうとしましたが、この情報が漏れると世論の非難を浴びます。当時の江精衛政府も黙認できず北平の知名の士、白隆平を派遣して日本軍と交渉することとなりました。白隆平は、遺骨を分けて供養することを提案し、一方は北平で塔を建てて供養し仏教を広めると提案しました。日本軍もついに遺骨を日中で分けることに同意しました。最終の合意点の内容は、一部を南京に残し、玄奘湖五洲に塔を鐘て供養する。もう一部を北平の弘福寺に送って供養する。ほかの一部を日本に持っていく。でした。」という記述があり、1943年か44年か不明だが、「白隆平」が遺骨の分骨を提案して日本軍と合意した形になっている。「白隆平」が白堅であることはすでに高田氏が指摘している。

- 56) 『季刊永青文庫』(68号、2009年)11頁に写真が掲載されている。この拓本は「平成21年度秋季展」の際展示された。

野も就任している。岡部は1923年に評議員になっているが、当時彼は外務省対支文化事務局事務官であり、おそらく外務省の関係で就任したと思われる。ちなみに岡部の父長職は1918年から死去する25年までこの団体の顧問であった。

一方、水野は昭和6（1931）年に重光葵ら数名と共に評議員に就任している。また、『追懷録』の記述によると日清戦争前後には15当主細川護久の知遇を得ていたようで、早くから細川家とも関係があったようだ⁵⁷⁾。

このような水野と日華学会、その会長の護立との関係を踏まえ、想像をたくましくするなら、細川は、白堅所蔵の三体石経残石の拓本を、水野を通じて入手したのではないだろうか。とするならば、水野と白堅は1943年以前に知り合っていたことになる。

5、石鼓文拓本敬贈の背景

こうしてみると、白堅、岡部、水野の三者の間に何らかのつながりがあったことがわずかながらうかがい知れるのであるが、では、最初の「なぜ1940年の時点で白堅は岡部からの書簡に感激して石鼓文の拓本を敬贈することになったのか」という課題をどう考えるべきなのであろうか。

この三者の、それぞれの来歴や相互の関係、そして中国とのかかわりに関する資料をみてみると、そこに、三者に共通するキーワードが浮かび上がってくる。それは「反共」と「華北」というキーワードである。そこで、この2つのキーワードを分析してみよう。

まず、「反共」であるが、白堅は、先に見た木村の『民族の咆哮』の中で「華北に本拠を有する反共大同盟及敬天会の指導的立場」の人間として紹介されている（しかし、実際の活動はわからない）。また、岡部はこれも先に掲げた論説の中で、共産主義による華北の「赤化」に対抗するため、「文化の戦い」を提唱している。そして、水野は『満洲文化を語る』の中で、頻繁に共産党勢力への警戒とその拡大の阻止を提唱している⁵⁸⁾。つまり、この三人は、いずれも

57) 前掲注44『水野梅曉追懷録』83頁および137頁。しかし、年齢的には15～6歳であり、にわかに信じがたい。記録に混乱があるようである。

58) 例えば、水野「東方文化の精髓」（前掲注48『満洲文化を語る』所収）の中で「恐る可き赤色ロシアに対する、外蒙古人心の不安。国境を超へて内蒙に入る為には、赤色ロシアの官憲に、発見さるれば銃殺の憂目に遭ふにも拘らず、彼等はその危険を冒して、続々と逃れ来る。」（98頁）などである。

共産勢力の拡大に警戒を抱き、同時に敵対心を有する点で共通しているといえる。しかし、それは当時の知識人や政治家の間では、むしろ共有されている感覚のものであり、この三者だけに特徴的なことではない。それに比べると、「華北」というキーワードは、三者を結びつける重要なキーワードとして注目できる。

まず、岡部と水野は上述したように、東亜同文書院の華北（北京）への移転実現に向けて行動を共にした間柄である。彼らは、何としても華北に対中国文化政策の拠点を築こうとしたらしく、そのため、岡部は独断で水野を派遣した。その水野は現地において軍部と折衝し、北京における開校予定地（清華大学跡地）まで決めて帰国し、その後なかば強引に移転を進めようとした。このように、執拗に華北にこだわった背景には、中国文明の淵源たる華北に「文化の戦い」の拠点を置き、共産勢力に対抗していくという発想が両者のあいだに共有されていたと思われる。もっとも水野は、満洲と熱河（日本占領地域）にのこる中国文化の精髓の保存することに、より強い関心があり、岡部の主張とはニュアンスがずれるようにも思うが、少なくとも当時、中国での文化支援活動（岡部の場合は教育機関の設置）の中心を華北におくという点で、軍部の華北工作とあいまって、両者はほぼ共通していた。一方、白堅は、華北に拠点を置く「反共大同盟」「敬天会」の重要メンバーであり、王克敏の臨時政府のメンバーだった。しかも1940年前後には、北京に活動の拠点を置いていたことが今回の書簡と、京大人文科学研究所に残る書簡の住所から明らかである。つまり、1937年以降水野と岡部は華北での対中国文化政策に強い関心を持ち、白堅はその華北にある臨時政府に所属して、三人はこの時期、華北での軍部による対中国政策に密接に結びついていたと考えられる。

ところで、白堅が岡部に送った石鼓の拓本であるが、前述したとおり、当時この石鼓は北京に残る中国最古の石刻資料であり、唐代より知られている貴重な文物である。その点からすれば、ある意味これは北京に残された中国文物の白眉でもあった。その石鼓が1930年代、北京から南京に移され（と白堅は認識している）、不明となっていることは、白堅にとって石鼓は、満州事変とそれに続く熱河作戦で混乱する華北社会において、歴史的文物がいかに危機的状況にさらされているかを示す、もっとも象徴的な文物であったといえるのではないだろうか。そして、その貴重な石鼓の拓本を岡部に敬贈し、早急に文物の整理・研究の機会が到来することを待ち望む、と記す（上述書簡A）白堅の脳裏には、華北の諸文物の保存・伝承が喫緊の課題である、という考えが浮かんでいたのではないかと。そう考えてくると、白堅が「感激」したという岡部からの

書簡には、あるいは、華北に中国文化の研究の拠点を置こうとする長年の岡部の考えが示されていたのではないだろうか。そしてそれに白堅は感激したのではないだろうか。

先の石田氏によると、東亜同文書院の北京移転構想は38年以後もたびたび形を変えて提議されていた。そして、恐らくそれが実現できないまま39年岡部は東亜同文会の理事長を辞任することになった。また、石田氏は、岡部がもともと東亜同文書院の活動をあまり評価していなかったということを指摘している⁵⁹⁾。それは、今まで述べてきたように、中国を理解し研究していくには、華北こそその拠点にふさわしいと考えていたからであろう。そういう岡部の考えの背景には、「無二の兄友」水野の思想があり、この両者と接点を持つ白堅が「華北を中心とする対中国文化事業の遂行」という岡部の考えに共感したのではないかと考えられる。もちろん、白堅は高田氏の指摘されるように、中国文物の売買を行なう「ブローカー」の要素が多分にあったことは事実であろうし、岡部への書簡を見ても、拓本の希少性を強調している部分などをみると、これを契機に華族政治家を中心にした新たな文物販売ルート開拓のための人脈づくりを意図していたとも十分に考えられる。しかし、当時にあってはたいへん貴重なものになっていた石鼓文拓本をあえて敬贈した裏には、こうした人脈作りとともに、もう一方では、華北に残る歴史的文物を保存し、後世へ伝承していくために、その一つの方法として華北での文化活動に意欲を燃やす岡部と関係を結ぼうとする意図もあったと考えることもできる。

6、結びにかえて

以上、「なぜ1940年に白堅から岡部長景に石鼓文拓本が贈られたのか」をめぐり、両者の経歴や、1937年に持ち上がった東亜同文書院移転問題、さらに水野梅曉の動向を追いながら、敬贈された背景を考えてきた。最後にこれらをまとめて結びとしたい。

筆者が入手した「石鼓文」拓本に付されていた書簡から、この拓本が1940年3月に北京にいた白堅から東京の岡部長景に贈られたことが判明した。

白堅という人物は、高田時雄氏によると、1920年代後半からさかんに来日し、「敦煌写経」など中国の貴重な書画・文物を売却するブローカーであった。また、

59) 石田前掲注31論文25頁。

1937年末に成立した中華民国臨時政府に所属し、40年代には反共団体の指導的地位にあったようである。一方、岡部長景は、大正期から外務省の東方文化事業に携わり、貴族院議員になった後も日満文化協会副会長、東亜同文会理事長に就任するなど、戦前の対中国文化政策に深くかかわった華族政治家であった。

両者がいつ知り合うことになったかは不明といわざるを得ないが、この2人を結びつけた可能性のある人物が水野梅曉だった。水野は明治期後半に中国に渡って以来、日中関係のさまざまな場面で裏方として活動した人物である。この水野は岡部と大変親しい関係にあり、とくに、1937年に起きた東亜同文書院の華北移転問題では、2人はその推進役だった。また、1942年に南京で発見された玄奘三蔵の頂骨を日本にもたらし、それを埼玉県岩槻の慈恩寺に安置したのも水野だった。一方、白堅とは玄奘三蔵霊骨分骨の際、接触していた可能性が強い。さらに、永青文庫に所蔵されている「三体石経残石拓本」は、白堅から水野を介して細川護立の手に帰した可能性があり、何らかのつながりがあったと推測できる。

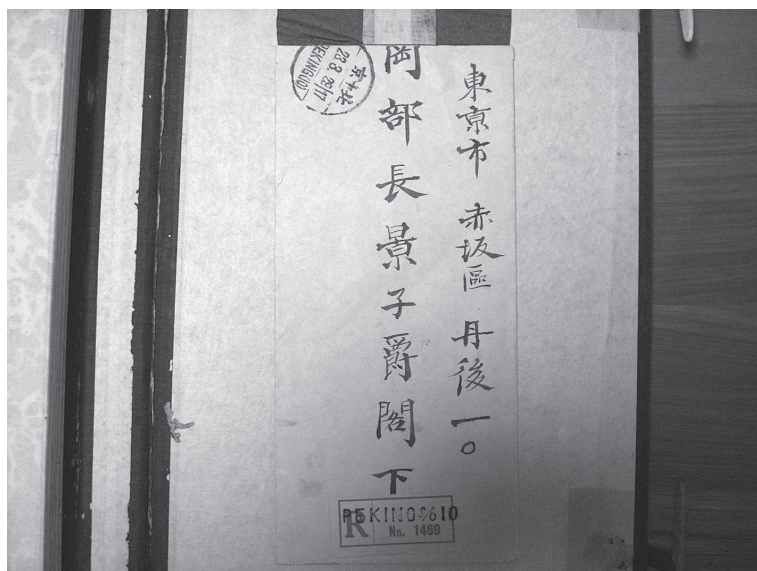
この3人の活動と中国に対する立場を考えていくと、3人は「反共」「華北」というキーワードで結びついてくる。とくに、華北（北京）を拠点にした学術交流や中国研究のための教育機関設置などを進めようとする岡部と華北・満洲の文化遺産の保存・伝承に情熱を燃やす水野。北京に居て中国文物の保存・伝承が危機的状況にあることを深く憂慮する白堅は、「華北での諸文物の保存・伝承と研究」が喫緊の課題であると認識する点において共通した考えを持っていたと考えられる。したがって、1940年に白堅が岡部に「石鼓文」拓本を贈った背景には、北京にある中国最古の石刻資料であり、北京に残る貴重な文物の象徴とも言える石鼓が所在不明な中、その拓本を岡部に贈ることで、岡部の対中国文化政策に共感すると同時に、岡部を介しての新たな文物販売のための人脈作りをも計算に入れながら、さらなる交流を希望していたということが考えられる。



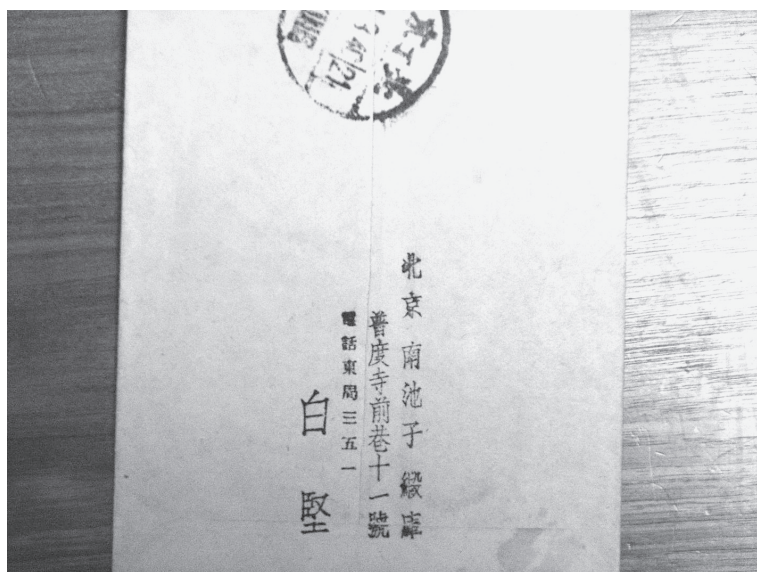
写真①



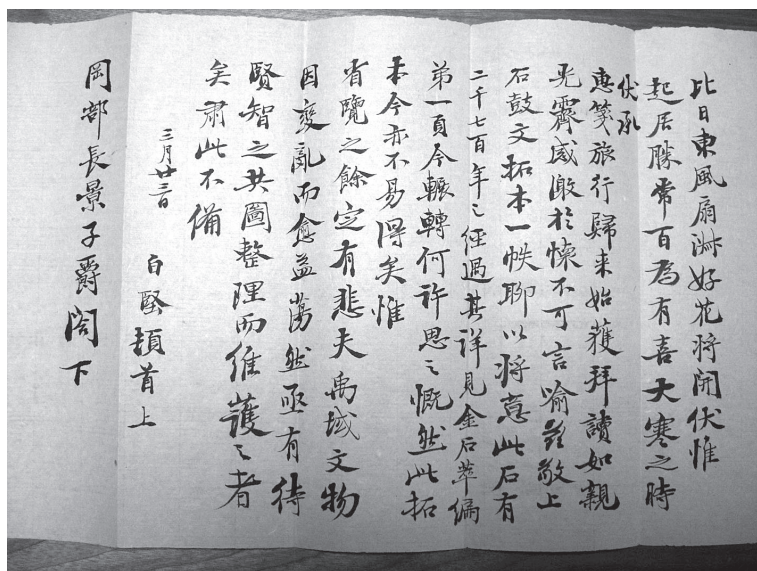
写真②



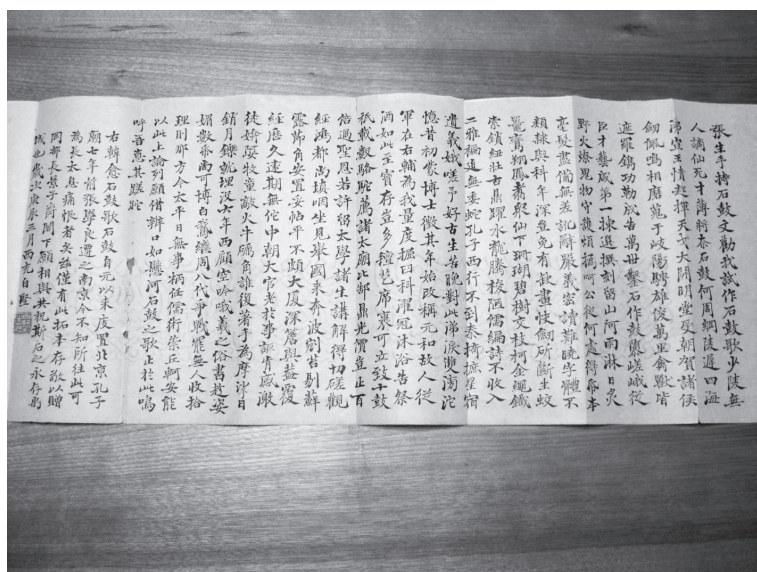
写真③



写真④



写真⑤



写真⑥

